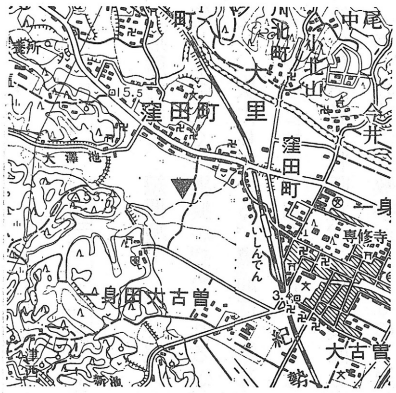
三重・六大（ろくだい）B遺跡

1　所在地　三重県津市大里窪田町
2　調査期間　一九九二年（平4）九月～一二月
3　発掘機関　三重県埋蔵文化財センター
4　調査担当者　小菅文裕・中村光司
5　遺跡の種類　集落跡・官衙跡か
6　遺跡の年代　弥生時代後期以降
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

六大B遺跡は、伊勢平野のほぼ中央部、津市街地から北北西へ約五kmの、志登茂川支流毛無川の左岸に位置する。丘陵を挟んで南方四kmの安濃川流域には、弥生時代の拠点的集落である納所遺跡がある。遺跡の立地は、毛無川に向かって緩く傾斜する沖積地で、標高七～一一m前後を測り、付近一帯には水田が広がる。



（津西部・津東部）

六大B遺跡の調査は、国道二三号バイパス・中勢道路の建設に伴う緊急調査であり、一九八八年度は三重県教育委員会が、一九八九年度からは三重県埋蔵文化財センターが調査を実施している。

昨年度までの調査で、遺跡が南北三〇〇m以上の範囲に広がること、弥生時代以降の全時代にわたる複合遺跡であることなどが確認されている。主要な遺構として奈良～平安時代にわたる掘立柱建物群があり、大型掘立柱建物を中心とする建物群の配置には計画性が窺われる。全体的に遺物の出土量は多く、遺跡の性格を示す出土遺物として、多量の緑釉陶器、円面硯、和同開珎銀銭、石帯などがあげられる。

今回木簡が出土した遺構は、掘立柱建物群より西側の地区で、東西方向に走る幅約二m、深さ約四〇cmの溝である。遺跡の中心からやや西寄りに位置すると考えられる。共伴遺物には、高台をもつ須恵器杯、暗文の認められる土師器皿などがある。木簡のほか、この溝からは木製遺物の出土があったが、多くは自然木（枝等）である。溝の時期は、須恵器杯から判断して八世紀後半（奈良時代末）に比定でき、木簡もこの時期のものと考えられる。

出土した木簡は一点で、他には一三世紀後半の井戸から木簡状の木製品一点（〇三二型式）が出土している。

8　木簡の釈文・内容

(1)

・「□□□